

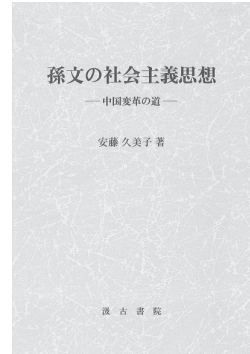
●書 評

安藤久美子著

孫文の社会主義思想

——中国変革の道

汲古書院／2013 年 6 月／486 頁／13,000 円＋税



齋藤道彦

本書は、安藤久美子（敬称略）が一九六八年から二〇一二年までの四〇余年にわたって孫文研究（戴季陶・陳其美論を含む）を追求してきた執念の集大成であり、全一章からなる。本書は、孫文三民主義の民生主義の検討を中心課題とするが、それにとどまらず、民族主義・民権主義も取り上げている。本書は、中国近現代史、孫文三民主義、中華人民共和國を見直す重要な示唆を含んでいる。わたし（以下、評者と称する）は、正面から孫文研究などしたことがないので、書評の資格があるとは思えないが、一読者として非力を顧みずお引き受けた。本論が四四四頁に及ぶ本書のすべての論点にコメントすることは、紙数の関係からできないが、本書の紹介とともにいくつかの問題に言及したい。

言うまでもなく孫文は中国近現代史研究の重要テーマなので、大量の研究が積み重ねられてきている。本書が、渉猟している資料は膨大である。

序章「社会主義者として生きた孫文」では、ソ連型社会主義とレーニン、毛沢東の孫文論を基準として孫文は社会主義者ではないと否定する見解に対峙し、安藤は孫文を社会主義者として位置づける視座を提示する。この点に関して、評者に異存はない。

第一部「孫文の社会主義思想」（全三章）では、コミンテルンの方針と中国共産党および孫文構想との、三民主義、土地革命を中心とする討論、すり合わせ、妥協の

過程が検討されている。

第一章「孫文の社会主義思想の特色——主としてソ連との相違」では、孫文の地権平均論、中国国民党第一回全国代表大会（以下、国民党一大と略称）における孫文とコミンテルンの方針との関係を論ずる。

第二章「中国国民党第一回全国代表大会宣言と孫文思想」では、さらに国民党一大におけるコミンテルンの方針と孫文思想との対立を分析する。従来、国民党一大はわかったようではない規定が少なからずあったが、安藤はこれらの中身を解明している。一九九一年ソ連の崩壊後、モスクワ・アルヒーフが公開されていた。この日本語訳がまだないのは、日本の中国研究の重大な立ち遅れだが、安藤はこの資料の中国語訳を利用して、新たな歴史像を提示している。

第三章「孫文の社会主義思想再論」では、孫文三民主義思想全体を論じ、改めて孫文が社会主義者であると確認する。

第二部「中国同盟会左派の思想と辛亥革命」（全一〇章）。

第一章「孫文派の土地国有論と辛亥革命」は、辛亥革命研究史を取り上げ、地権平均論のとらえ直しが必要を提起、『民報』における土地国有論を検討し、孫文派の「地権平均即土地国有」論は「封建地主をなくすことを目的としていた」（一一三頁）とする。

第二章「孫文の民族主義と辛亥革命——その反帝国主義的意義について」では孫文理論は「矛盾・混乱」しているという見方に対して、孫文は「最も鋭く帝国主義の本質をとらえていた」（一二八頁）との評価を対峙し、孫文の反満革命論、孫文の対日観を検討する。

第三章「孫文の外資導入論と反帝国主義革命構想」では、孫文の外資導入論を「直接的排外的対決を避けて、それに代わる闘い方をした」（一八七頁）と肯定し、南京臨時政府の外交、満州租借借款交渉問題、日中提携論を取り上げている。

第四章「辛亥革命運動と帝国主義——列強の海関管理に反対する運動から善後借款反対運動へ」では、辛亥革命における海関接収をめぐる各地の動きが具体的

にトレスされており、南北和議交渉、善後借款問題などが検討されている。

第五章「民権主義と孫文思想」では、孫文の民権主義が興中会時代、中国同盟会時代、辛亥革命時代、臨時約法における地方自治の欠如批判、五権憲法論を通じて一貫して変わらないものであったととらえ、孫文の闘い方が「平和的、調和的」（二六一頁）であったと特徴づける。

第六章「孫文の『五族共和』批判と戴季陶の連邦共和制論」では、孫文が「大漢族主義者」であったとする見解に反論し、孫文は「五族共和」に「賛成ではなかった」こと、一九二〇年代には「五族共和」を批判したとし（二七二頁）、「大漢民族主義者でも種族同化主義者でもなく、諸民族の平等な統合の方法として連邦共和制をとった」（二七二頁）と論ずる。

第七章「辛亥革命前後の戴季陶の共和思想」では、孫文理解者としての戴季陶を取り上げ、戴季陶は「超国家主義者」ではないと否定し、「省長民選」論などを紹介している。

第八章「陳其美と辛亥江浙革命」（前

篇〕辛亥革命前における陳其美をめぐる〕では、中国同盟会上海機関部の中心人物として孫文革命を支えた陳其美を高く評価する。第八章はふたつにわけられていて「陳其美と辛亥江浙革命（後篇）辛亥江浙革命前における陳其美をめぐる〕では、蒋介石による陶成章暗殺と陳其美は無関係と推定し（三七六頁）、陶成章暗殺は陳其美の指示とする通説に一撃を加えている。

第九章「孫文臨時大總統選出と各省都督府代表連合会」では、南北交渉の駆け引きの中で孫文の臨時大總統選出に至る複雑な政治過程が解明されており、孫文派がいかに北京の袁世凱政權や立憲派および列強の動きなどに制約されていた中で孫文の選出が実現したかを明らかにしている。

結章「孫文思想の遺産」は、孫文三民主義に関する安藤の諸論点のまとめであり、孫文思想は「二一世紀の人類への遺産」としめくくっている。

以上、簡単に各章別の紹介をした。次に、三民主義の各項別に見ていきたい。

民生主義について

孫文は、みずから社会主義者であると称している。マルクス主義では、大きく空想的社会主義と科学的社會主義とに大別し、マルクス主義以外は、すべて空想的社會主義とするが、安藤は「様々な社会主義」が存在する（六〇頁）と指摘し、マルクス主義の規定からの「社会主義」把握の相対化を追求する。社会主義とは本来、貧者・弱者への思いやりを核とするであろう。経済を「神の手」に委ねることで事足りりとしたり、資本主義の市場原理だけを当然視したり、利益追求は正当という論に終始したりするのではないところに社会主義思想は立つはずである。孫文社会主義の社会主義たる所以は何か。「子供たちに靴を履かせ、米を食べさせる」（六頁）ことを課題としていたという点で、孫文も貧者・弱者への思いやりを思想の立脚点としていたと見られる。

しかし、貧者・弱者への思いやりがあったとしても、それだけでは十分ではない。マルクス主義は、マルクス主義以外にはそれがどのように達成されるかに

ついての科学的根拠がないと批判し、空想的社會主義だと断罪したのであった。孫文には、マルクス主義の主張する計画経済論はない。資本主義社会にも計画がないわけではないが、マルクス主義の言う計画経済とは実現可能なのかという問題は残っている。どのような社会主義であれ、貧者・弱者への思いやりがどのように法制化され、社会保障・教育などのシステムが設計され、実態が確保されているかが問題なのである。

第二部第一章論文は、一九六八年発表である。一九六八年と言えば、文化大革命の最中であつたが、当時、安藤は文革に共鳴していた（まえがき、四三七頁）という。「階級」規定が中国でもっとも強調されたのは、正にこの文革時期であつたが、文革における「ブルジョア的」という用語は「憎むべき」という以上の内容がないことが多かった。安藤は、一方で日本の戦前の中国理解・孫文理解に「機械的に階級理論が適用」されていたことを批判するとともに、他方で「階級的観点が甚だあいまいな民族のと

らえかた」(九五頁)を批判しているように、「階級」的視点・分析にかなりこだわっているが、「階級」を前面に押し出す視点とは異なる見方・分析があってもよいと思われる。すべての概念は、それが表わそうとしている対象を立体的にとらえるべきであり、「階級」はその一部にすぎず、孫文論において「階級」論はあまり有効とは思われない。

安藤は、孫文の明治維新評価や日露戦争に関する論評に対する岩村三千夫などによる思い違いとしか言いようのない的外れな批判、決めつけを批判しているが(一四九、一五〇―一五一頁)、岩村らの議論は「階級」論から生まれたものであった。従来の中国近現代史研究では、圧倒的にマルクス主義の枠組が支配的であったし、安藤もその枠組を否定しているわけではないが、安藤は具体的な分析の中でマルクス主義をどう位置付けるのかという問題を事実上提起しているように思われる。

孫文は、現実主義的政治家・革命家であったという点に特色があった。つま

り、変動する革命環境の中で革命目標に接近するための現実的選択を絶えず行なっていたととらえるべきで、この視点は安藤の孫文アプローチの視点と一致するか、ないし近いものだと思う。安藤も具体的には従来の中国近現代史の図式にとらわれず、リアルな視点で分析を行なっている一方、「階級的立場」(一三頁)にこだわらず、階級に還元しようとし、マルクス主義の「階級」論、「改良」・「革命」分類、反「帝国主義」か否かといった図式にとらわれているという面があるように見える。

民権主義について 安藤は、民権主義についてはコミンテルン、ボロディンらによる孫文憲政構想に対する否定論は孫文憲政論とは決定的に異なることを指摘している。

孫文構想の特徴のひとつは、五権憲法論である。安藤は、孫文の「五権分立」論について欧米の共和制を乗り越える意図と規定する(三七頁)。五権分立は民主主義制度のひとつの案ではあるが、なぜ五権分立が三権分立を超えると見え

るのか、三権分立に弊害がある(二五九頁)として五権分立でどのようにそれが克服されるのかについて明確な説明はないように思われる。

五憲分立とともに、孫文構想でわかりにくいことに、立法権と創制権の関係、立法権と複決権の関係などがあり、解説してほしかった。立法院で決定された法律についての複決権とは、三権分立制における既定の法律を廃止したり、否定された法律案を改めて可決したりすることとどこが違うのか。

安藤は、横山宏章が主張する孫文の「愚民観」を否定する(三八、七四頁)。孫文の「訓政」論にのみに限定すると、孫文は「愚民観」の所有者だという指摘は成立するだろうが、孫文の「憲政」目標においては「人民」への信頼が前提となっている。安藤は、孫文は一貫して人民を信頼していたと見る。孫文が訓政段階を不可欠と考えたのは、中国社会の歴史的蓄積と発展段階にそれなりの理由を見いだせるが、「訓政」期間は六年と限定されており、中国共産党の無期限憲政否定

とは異なる。人民が愚民なら、六年の訓政期間を設けても憲政にふさわしい賢民になることなど不可能であろう。訓政六年を経て憲政へという孫文構想から言えば、孫文の民衆観を愚民観と決めつけることはできないだろう。当面する人民の知識水準が低いというのは、孫文が直面した現実の認識であって、孫文は人民の憲政への前進を構想した点で、安藤の「孫文」愚民観」否定論は説得力がある。

孫文政治論では、「主権」と「治権」が区別される点に特徴があるが、「主権」と「治権」とは国民主権という統一体の二つの側面としての「主権」（選挙権、罷免権、立法権など）と「治権」（統治機構）というとらえ方が必要だと思われる。

民族主義について 中国の民族主義は二重構造で、「外向きの民族主義」と「内向きの民族主義」とがある。外向きとは言わば反帝国主義であり、内向きとは国内民族関係ということになる。孫文の民族主義は、清朝統治下革命運動においては「反満」であったので、内向きということになるが、孫文は反満を通じて「反帝

国主義」を闘ったと安藤は意義づける。

孫文は、「反満」主義者であったが、安藤は「反満」の実態について中国同盟会各派の精密な分析の必要性を提起している（一一七―一八頁）。この点は、同盟会の思想分析として重要な問題提起と受けとめたい。

「中国は中国人の中国である」というスローガンは、反満の言葉であった。満族は中国人ではないという意味で用いられていたのだが、安藤は中国同盟会期に孫文が言った「中国は中国人の中国である」という言葉の中の「中国人」は満族を排除してないと断言する（二八五頁）。その根拠は、何だろうか。孫文が言った「中国人」が拒俄運動で言われていた「中国人」とは違うという点を孫文の言葉で説明してほしかった。

安藤は、孫文は「偉大な思想家」（まえがき）と絶賛するが、孫文にも問題点はあるだろう。評者は、孫文の認識にも革命家なるがゆえの歪みがあると見るが、安藤はこの側面に言及しない。

例えば、「帝国主義列強の中国侵略の

手先となった政府」（二四〇頁）、つまり「清朝」帝国主義の手先」という孫文の認識は、革命家としての「政治」的言語であったが、その後の中国近現代史研究はこの認識を前提とするようになり、「歴史」認識に持ちこまれていった。また、孫文は義和団のエネルギーを評価したが（一一五―一六頁）、義和団の方向性・思想性は肯定的に評価できるのか、批判的に見るべきなのか。安藤には、孫文の義和団評価について、その排外的精神・エネルギーへの評価と不合理的側面への批判はあるが、肝心の義和団は扶清滅洋であって反清ではなかったことについての言及がないことへのコメントがない（二六―二三八頁）のはなぜだろうか。

孫文の「中華民族」構想は、「大漢民族主義」だとの批判を、安藤は真つ向から否定する。安藤は、孫文の目標は「漢民族による国民国家の建設」（二七四頁）だったのであり、孫文は「漢民族主義」ではなく、「漢民族による国民国家の建設」とは「世界大同のための、第一歩」だ（二七五頁）と意義付ける。

理想としての「世界大同」はいいとし

て、「漢民族による国民国家の建設」は具体的現実的には何をもちたらすのか。それは、漢民族と他の少数民族との「内向きの民族主義」という問題となる。安藤は、孫文が「少数民族」の同意を求めることもなく、少数民族を漢民族に同化させることによって「中華民族」を形成するという構想を「諸民族の平等の実現」をめざしたものと手放して礼賛するが、現実としての「中華民族」は漢民族による少数民族の抑圧となつてこなかっただろうか。安藤も、「歴史はそのように流れた」（二九〇頁）といちおう認めるが、「思想」は「歴史」によつて検証されるのではないだろうか。

安藤は、孫文・革命派の「反滿」から「五族共和」への転換過程に迫り（二八二頁）、かつ「五族共和」への様々なスタンスを分析する。「五族共和」は、伍廷芳によつて提唱され、孫文の就任宣言はこの南北統一条件を踏まえたものだといふ（二八二頁）。そうであれば、「五族共和」は孫文自身の思想と見なすわけにはいか

ず、妥協の産物だということになる。

従来の中国近現代史で用いられてきた「改良」、「革命」という図式に安藤も含む日本人研究者も追隨してきたが、この図式から自由になることが必要なのではないか。「改良」、「革命」という安易なレッテル貼りとそれへの機械的反発（一三一―一三二頁）にはあまり意味がないと評者は考える。

次に、安藤は孫文が日本の対華二カ条は袁世凱の提案だったと断定している（一八三頁）が、袁世凱が日本による帝制支持を条件に二カ条を受諾したという通説に近い。これに対して評者は、袁世凱が二カ条について日本は中国を「何故に……豚狗の如く奴隸の如く取扱はんとするか」と抗議したという事実を指摘した（『五・四運動の虚像と実像——一九一九年五月四日 北京』中央大出版部、一九九二年）。これは、歴史像の見直しを提起したものであったが、安藤は袁世凱発言をどう読むのだろうか。安藤が従来の中国近現代史研究の枠組にとらわれていることを示す事例だと

思わざるをえない。

こうした清朝論、袁世凱論は、孫文の観点だけが中国革命史論の枠組の源泉であつたわけではないだろうが、孫文にも責任の一端があるのではないか。

従来の中国近現代史では、民族主義について、孫文のそれが「反帝」であつたかなかつたかという基準・分類が当然視され、安藤もそれに従っているが、この基準・分類にこだわるのではなく、異なるアプローチが求められているのではないだろうか。

安藤は、孫文思想が「二一世紀の人類への遺産」だと言うなら、「中華民族」論が現に何を生みだしているか、民生主義との関係で現台湾をどう見るかなどについて言及が欲しかった。

以上の、無知と好奇心に発する評者の論評は言わば外野席からのつぶやきにすぎない。読者が、本書から学ぶべき点は間違いなく多々ある。本書の功績は大きく、安藤の孫文研究は二一世紀の新たな孫文研究、孫文論の出発点を築きあげたものと言えよう。